

第 32 回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって

日本西アジア考古学会会長 三宅 裕

今回で第 32 回を迎えることになりました西アジア発掘調査報告会は、東京文化財研究所との共催の形で、上野公園にある同研究所を会場として開催される運びとなりました。これまでも東京文化財研究所では、本学会が主催するセミナーや講演会などを度々開催させていただいてきましたが、2 日間にわたっておこなわれる発掘調査報告会の開催は今回が初めてとなります。会場の提供ならびに報告会の運営にご協力いただいた東京文化財研究所の関係者の皆様には、心より感謝申し上げます。

プログラムを見ますと、今回の報告会ではポスター展示を含めて 30 件の報告が予定されており、コロナ禍で一時的に減少していた調査件数も、すっかり回復した観があります。コーカサス、アナトリア、レヴァント、北メソポタミア、エジプトに加え、特にアラビア半島と中央アジアにおいて盛んに活動が展開されている様子が窺えます。様々な地域から数々の新しい成果がもたらされていることを大変喜ばしく思っております。また、今回は久しぶりに海外からのゲストをお迎えすることができ、戦時下にあったシリアのパルミラ博物館での保存修復活動についての特別講演も予定されています。仲介の労を取っていただいた、西藤清秀元会長にも感謝申し上げます。

シリアといいますと、昨年 12 月に飛び込んできたアサド政権崩壊のニュースは、まさに青天の霹靂であり、たいへん驚きました。ファフーズ、バシャルの親子 2 代によって半世紀以上にわたり続いてきたアサド政権が、かくもあっけなく崩壊してしまうとは、専門のアラビストでさえもまったく予想していなかったと聞きます。シリアは日本の調査団にとってもたいへん縁の深い国であり、1990～2000 年代にかけては、西アジアの中でも最も多く日本隊が活動していた国でもありました。私も 1990 年代には、ほぼ毎年のようにシリアに出かけ、発掘調査に携わっていただけに、当時のことがいろいろと思い起され、何とも形容しがたい感慨に襲われました。

「独裁」、「世襲」、「強権的」などと様々な批判があったアサド政権ではありましたが、「アラブの春」に端を発する内戦の勃発以前は、外国の調査団にとって大きな規制や障害もなく、むしろ調査のしやすい国であったと思います。幾度か現地に足を運ぶ中で、長く政権の中枢を担ってきたのはアラウィ派と呼ばれる少数派の人々であることや、クルド人、アルメニア人、トルクメン人(トルコ系)などのほか、キリスト教徒も少なくなく、民族的・宗教的にたいへん

複雑な構成であることも知りました。シリア滞在中には、私たちの宿舎にまで秘密警察が立ち寄り、怪しい動きがないか周囲に確認していたことも思い出されます。「叩いても埃も出ないのに」と思っていたが、現地の人々にとっては大きな圧力となっていたに違いありません。少数派が国を統治するのはそれだけ大変だったのかもしれませんが、周囲ののどかな農村風景とは裏腹の、厳しい政治の現実を垣間見たような気がしました。

首都ダマスカス陥落の際に、市民が見せた笑顔や興奮は、政治的抑圧からの解放感に満ち溢れているようでした。新しい国家体制の構築が順調に進むことを願うばかりですが、大量の難民の帰還問題、勢力圏を確立させたかにみえるクルド系住民の動向やそれを好ましく思わない周辺国の思惑など、難問も山積しています。そもそもシリアのパワーバランスを崩す遠因になったのは、ロシアのウクライナ侵攻やイスラエルのガザ地区への侵攻であったとみられており、複雑な国際情勢ともうまく折り合いをつけていく必要もあります。まだまだ先を見通すのは難しい状況にありますが、一日も早く日本からの調査団がシリアの地で活動を再開させられる日が来ることを願ってやみません。それは、とりもなおさずオリーブの木が数多く繁るこの地に、再び平和と安定が訪れたことを示すものとなるからです。
